

世かい一大切なお姉ちゃん

廣瀬 遼

ぼくはお姉ちゃんが大好きだ。

お姉ちゃんの体は、とてもあったかい。ぼくは、ねむくなる
と、いつもお姉ちゃんがこいしくなつて、あったかいお姉ちゃん
にくつついてしまう。お姉ちゃんは、やさしくぎゅうつとして
くれる。時々、気げんのわるい時はつきとばされてしまうけれ
ど、そういう時にはアイスをあげると、すぐにニコニコえ顔に
なつて、くつついて一しよにアイスを食べてくれるんだ。

ぼくは、大好きなお姉ちゃんの顔を見るだけで心がポカポ
カあつたかくなつて、しあわせな気もちになる。お姉ちゃんっ
てふ思ぎ。

くつつくとあつたかいぼくのお姉ちゃんは、心もあつたか
い。いつも自分のことよりも、ぼくの心ばいをしてくれるお姉
ちゃん。自分のうでをけがしてびょういんから帰つて来た時
も、一人でのす番していたぼくのことを、まっ先に心ばいして
くれてなみだが出そうになつた。全く泳げないお姉ちゃんが
遠泳合宿で、なんと45分間も海を泳ぐことになつた。ぼくは、
心ばいでたまらなくて、ごはんものをどを通らなくなつて、毎
日ふとんに入ると「お姉ちゃんが生かしてしまつたらどうし
よう……。」と、こわくてたまらなくなつて、なみだがポロポロ出
た。ぼくは神さまにおいのりをした。ぼくのことをいつもま
もつてくれるお姉ちゃんがぶじに完泳できて、いつものニコ
ニコえ顔で帰つて来てくれますように。お姉ちゃんは、ぼ

くが書いた手紙をおまもりにしてくれて、強い心でがんばり
ぬいて自信いっぱいいきらきらのえ顔で帰つて来た。ぼくは
うれしくお姉ちゃんにだきついた。お姉ちゃんはとつても
あつたかかつた。

ぼくがもつと小さい時、かん東大地しん(注・東日本大震災
のこと)がおきた日、ぼくたち姉弟は東京えきにいた。えきの
ホームにとまつている新かん線が船のようにゆらゆらと大
きくゆれて、空に見えるいくつもの高そうビルはとなり同士
がぶつかりそうなくらい大きくゆれていた。ホームの屋根が
バキバキと音をならして、かんばんみたいなものがおちてき
たりした。お姉ちゃんとはつさにぼくの頭の上におおいかぶ
さつてまもつてくれた。そして、自分のほうしをぼくにかぶ
せてくれて、自分のスーツケースとぼくの大きなにもつも全
部かかえて、ぼくの手をぎゅつとにぎつて、はしつて安全な場
しよまで一しよにひなんした。

ぼくは、その時のぼくをまもつてくれたお姉ちゃんの体の
あつたかさど、強くにぎつてくれたお姉ちゃんのあつたかい
手を忘れない。

ぼくは、その時から一生お姉ちゃんをまもるつてきめたん
だ。今は、チビでなき虫だけど、いっばいべん強して、強くてや
さしい人になつて、お姉ちゃんをまもつてあげるんだ。

お姉ちゃんいつもありがとう。